

川柳 さいたま

年賀風交



京都御所

2020年
1月号 (No.722)

日川協加盟

巻頭言

土佐日記といへば

願法みつる

令和の御代も即位の諸行事が恙なく進行して、世は確と新時代に移ろい行く変化の鼓動を感じる年頭になった。

日本人の心の在り様を含めて、日本文明の姿も変現してゆくのではないだろうか。その一側面にジェンダーの混沌という見方があるかも知れない。社会的文化的な性別感覚が、様々な主張や形態を伴って変化してゆくようだ。

「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」で始まる土佐日記は、勅撰歌人の紀貫之による本邦初の女文字形態による日記文学である。この後に続く絢爛たる女性文学への窓を開いた功績は、大きいとされる。

しかし官人による漢文記録者の立場からすれば、躊躇があったかも知れない。自己観照を深化させながらも誹諧味を発露させたのは、笑いの表現への挑戦なのであつたらう。一方、最終部で「とまれかうまれ、とく破りてむ」（とにもかくにも、さつさと破り捨てよう）と記した思いの複雑さも、現代風に付度できるのではないだろうか。

そんな紀貫之の悶えの姿を、令和の御代における日本文学史の源流として見つめた川柳愛好家のひとりである。短い旅行記に仮託した土佐日記の混沌に、男と女の綾取りのような息吹を感じ取るが故に。そして現代川柳の世界を育む女性パワーの凄まじい（失礼、優雅に遅しい）在り様を、如実に実感するが故に。

現代川柳人の男に、貫之ほどの気概が期待できるか。

日日是好

願法みつる

表現の混沌というわっはっは

令和の世生きて然るかオトコドモ

病葉の今日一日へ風も来ず

落ち葉踏みながら別れの音を聞く

餅食えば喉を案ずる老いの春